

仙厓さんの絵を読む

—石村コレクション「寒山拾得図」について—

古 田 雅 憲

“Hanshan and Shede” : Sengai’s Intention

Masanori Furuta

【はじめに】

「仙厓さん」こと仙厓義梵は美濃の人。臨済禅の僧侶として江戸時代後半に生きた（1750–1837）。その前半生を諸国行脚に多く費やしたが、数えて39歳の春、招かれて博多を訪れ、翌年（1789）、今も博多区御供所町にある聖福寺の第123世住持となった。以後、亡くなるまでの約50年の間、常に博多の町衆とともにあった。

61歳でいったん住職を退いてからは特に好んで筆を執り、たくさんの絵を描いては以て自身の修養の種とし、あるいは周庶の教化の縁とした。時に求められるままに描きもした数多くの絵の、その筆さばきの軽妙洒脱、天真爛漫なこと——今日の博多っ子も親しみを込めて「仙厓さん」と呼ぶ。

仙厓絵のコレクションは出光美術館のそれが有名だが、福岡市美術館にもまとまったものがある——「石村コレクション」と言う。博多銘菓「鶴乃子」でおなじみの石村萬盛堂のご先代・石村善右翁が蒐集されたもので、仙厓さんの書画ほか96点が収蔵されている*1。そのなかに「寒山拾得」を描いた一葉がある——その含意について些かなりとも思いを巡らしてみたい、それが小稿の趣意である。

【寒山拾得】

石村コレクションのそれは、「寒山拾得図」と聞いて普通に想像する図柄と

はずいぶん違って、何とも朗らかで可愛らしい一葉である（後掲図版④）。

周知のように「寒山拾得」とは、中国は唐代、天台山周辺にいたとされる伝説的な二道士の名である。諸伝諸注のおよそ一致するところでは、拾得は、天台山国清寺の豊干禪師に拾われて寺に住み、煮炊き掃除の寺務に従ったと言われる人。その裏山に隠棲した寒山は、しばしば寺を訪れては自作の詩を拾得と詠み交わし、ついでに残り物を融通してもらって食していたと言われる人。仲良く遊ぶ二人の姿があまりに酔狂自在と見えたからか、やがて神聖視されるに及びとうとう文殊・普賢の化身として拝まれるようになったと言う。

そのような伝承を踏まえて描かれたからだろう、「寒山拾得図」には詩文を書いた卷子を広げ持つ寒山と箒を手にする拾得とが、何やら目配せしながらミステリアスに微笑みあうといった図柄が多い*2。

ちなみに二人の師である豊干禪師も偉い僧侶だったが、いつも虎の背に乗り徘徊しては村人を大いに驚かせるような人だったと言う。彼ら三人と一匹は世俗を超越する「風狂」という禪的価値の体現者として、みんな仲良くまどろむ姿で描かれたりもする——いわゆる「四睡図」である。



仙厓さんも多くの「寒山拾得図」を描いた。

そのうち幻住庵に蔵する「寒山拾得・豊干禪師図」（六曲一双、文政五年/1822年、仙厓73歳）に描かれる寒山拾得の姿は、特に印象的である。

卷子を手にする寒山と箒を片手に月を指さす拾得と、それじたいは伝統的な様式に従うが、お二人の容貌のなんと異様なこと*3。中山喜一朗さんの表現を借りれば、「異様な程稚拙で、粗っぽく、滑稽」で、「またその稚拙さが、独特の迫力も生み出している」*4。

この屏風は賛に「世画有法厓画無法／仏言法本法無法」との文言を含むところから、仙厓さんの画業にとって重大な転機を示す一作と見られている。「厓画無法」とは、再び中山さんの表現を借りれば、七十三歳を迎えた仙厓さんが「これから以後自分の進むべき絵画世界の何であるかを明確に意識した」ことの表明であり、自らの「絵画における種々の研鑽の終焉を示し」、「自己の技術にさらに磨きをかけ、より熟達していくことに歯止めをかけた」ことの宣言で

あった。「その高揚した意識，気分が」このような「稚拙」で「粗っぽく，滑稽」な二人の姿を描かせたのだろう——このような中山さんのお考えに論者もまた遵いたい。

◇

◇

もっとも，この屏風のような描きぶりはやはり例外的であって，仙厓さんの描く「寒山拾得図」のほとんどは何とも可愛らしい作品たちである。

たとえば出光美術館が所蔵する30余点である*5。それらの多くは「卷子を広げ持つ寒山と箒を手にした拾得が何やら言葉进行を交わす風」という画題通例の景色を描くが，二人の雰囲気はけってミステリアスではないし，まして異様だったり不気味だったりもしない。

たとえば「文化乙丑冬日百堂主人畫僮題」と記される対幅

(図版①)*6は比較的若い頃(1805年，仙厓56歳，「百堂」名)の作だが，それは「飄逸味も大きく加わった作風」*7とか，「飄々とはしているものの，明るくさわやかな人物」*8のように評される一葉である。その評言は，この作品同様に「百堂」と署名された二葉の「寒山拾得図」*9にも当てはまりそうである。

また幻住庵蔵の「寛政庚申冬日百堂主人」と記す一葉(1800年，仙厓51



■図版①「寒山拾得画賛」(出光美術館所蔵)

歳)*¹⁰や九州大学文学部(中山文庫)蔵の二葉*¹¹に見える寒山拾得の姿は、主として輪郭線を多用している点で描きぶりこそ異なるが、やはり「飄逸味」,「飄々」,「明るくさわやか」との評言に相応しいものと言えそうである。

◇

◇

また「股覗きをする拾得の背に乗った寒山が、岩壁に詩を書きつけている」様子を描いた一葉(図版②)*¹²もたいそう印象的である。そこに描かれた寒山と拾得は「幼なじみの子供たちが遊ぶ姿」そのものである。彼らの足下には「卷子と箒」が描き添えられているから、なるほど二人の正体はそれと知られるが、「実は彼らは二道士で」などとはもはやどうでも良いことに違いない。そこに見えるのは「ただ無心に遊ぶ子供」の姿である。この一葉に年紀は記されないが、中山さんによれば、「厓山人」の号と「仙厓」の白文長方印の使用から、60歳代後半の作と推定されるものらしい*¹³。

ちなみに「文化癸酉十月厓晝畫僉題」と記される一葉(1813年,仙厓64歳)はほぼ同一の図柄である——こちらには例の卷子と箒とが描き添えられないが、お二人の衣装は道士風のそれである。彼らもまたただ無心に遊んでいる風である*¹⁴。



■図版②「寒山拾得画賛」(出光美術館所蔵)

この「幼なじみの子供たち」はまた別の一葉にも現れている（図版③）*15。年紀は記されていないが、「厓画無法」の結実とも称すべき代表作と目され、鈴木大拙翁*16や古田紹欽師*17の著述にも取り上げられる一葉である。やはり中山さんの読み解き*18が秀逸なので、今それに遵いたい――



■図版③「寒山拾得画賛」（出光美術館所蔵）

地面に坐り込んだ仲のよい二人が、額を寄せあって経巻を見つめるでもなく話をかわすでもなく、何となくひと休みしている風情であろう。的確な描写力に裏うちされながら、技巧のもつ気取りがみじんも感じられないところに、「厓画無法」の実りがある。

【石村コレクションの寒山拾得図】

仙厓さんの描く多くの「寒山拾得図」と同様に、本図もまた朗らかで可愛らしい一葉である（図版④）。

画面上方、卷子を広げているのが寒山である。墨を多めに含ませた筆をやや寝かせて用い、息の短い線を連ねて蓬髪と道服をグイグイと描いている。一転して下半身では力を抜いた筆をスイスイと運び、太めの輪郭線だけを用いてスッとたたずむ様子を描き出す。仙厓さんの他の寒山図にも見られる描き方である。シンメトリカルなその立ち姿は、口を大きく開けて「阿」と声を発する

朗らかな笑顔と相まって、言うなれば「静」また「陽」。

画面下方の拾得は力みかえって、手にした箒もC字型にしようほど。立てた筆を自在に滑らせた細線で全身の輪郭をざっと描き散らし、その上から寝かせた筆で上着を塗り込めている。最後に筆を擦りつけるように使って蓬髪を描き添えた。左足を跳ね上げたその立ち姿は、口をへの字に曲げて「吽」と声を発する顰めっ面と相まって、言うなれば「動」また「陰」。

まさに「阿吽の呼吸」、二人好一对である。

ちなみに仙厓さんの「寒山拾得図」の別の一葉に、同様の趣向を滲ませる作例がある（図版⑤）*19。前後に立ち並んだ寒山拾得がともに顔を鑑賞者の方に向けている——それじたいは本図と同じだが、ただ両人の立ち位置は前後逆で、画面奥に箒を持つ拾得、その前に卷子を手を広げ持つ寒山が描かれている。

拾得は画面外の月を指さし、口を大きく開いて「阿」と叫びつつ満面の笑顔——月を見つけたことがそんなにも嬉しかったかと言うほど。片や寒山は黒目がちの瞳を凝らして卷子を見つめ、口をへの字に結んで「吽」と唸り

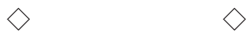


■図版④「寒山拾得図」
（福岡市美術館所蔵）

つつ嚙めっ面——詩の出来映えにまだ得心
がいかないと見えるほど。

賛に「一箇阿／一箇吽／謂之両界曼拏
羅」と言う。寒山拾得の好一對に「阿吽」
の一体を重ね見て、その向こう側に「宇宙」
を見通したような趣向である。

石村コレクションの寒山拾得もまた、や
はり仙厓さんの意識して「阿吽」の一對と
して描いたものだろう。およそ「この一葉
のうちに『万物の始まり』と『終わり』の
一体なるを感じ取られよ」とでも言ってお
いでなのに違いない。



さて賛に「南無からたんのふ／そこのけ
そこのけ」と言う——他の「寒山拾得図」
に添えられたものと比べれば、かなり異色
の表現である。

ちなみに他の「寒山拾得図」をざっと眺
めれば下掲のようなものが目立つ。

・大聖無聖／大智無智／終日看經／全不解
義指以標月／帚以除塵／大哉行願／赤城
草裏現全身 (No. 149—出光美術館編
(1988)『仙厓』所載の図版番号による。

以下同様。)

・天台霞色／峨眉月影／添得寒拾／大殺風
景 (No. 151, 163)

・忘指而不忘月則其月猶指／除塵而不除帚則其帚同塵／
天台霞起建標峨眉秋／高成輪相逢我與汝不知／何許人 (No. 152)

・梵經竹筍／相值相逢／語笑甚事／風幽松／更有近聽聲愈好／国清寺裏午齋鐘



■図版⑤「寒山拾得画賛」
(出光美術館所蔵)

(No. 154)

- ・ 国清之西／千仞厓罅／寒山題詩／拾得便次韻脚 (No. 155)
- ・ 拾得普賢薩埵／寒山文殊師利／若復斯經／不立文字 (No. 159)
- ・ 看經不解義／吟詩不知調／支帚不除塵／指月不忘指 (No. 160)
- ・ 詩向會人吟／酒逢知己吞 (No. 172)

およそ寒山拾得の伝承を踏まえて禅味を教唆する内容と言って良い。またそれらとはやや趣きを異にするものもあるが、やはり伝承場面の雰囲気それをとほのめかすような表現ではある。

- ・ 落華／芳草／天台春 (No. 178)
- ・ 佳句已得／白雲幽石／等閑擲却／聲如金石 (No. 179)
- ・ 泣露千般草／吟風一樣松 (No. 180)
- ・ 微風吹松／亦幽 (No. 181)
- ・ 露に泣千草の／色も秋佗て／月に吟よふ／松風の音 (No. 183)



賛の前句「南無からたんのふ」は、禅林でよく詠唱される経典「大悲心陀羅尼（大悲圓滿無礙神咒）」の冒頭「南無喝囉怛那（ナムカラタンノー）」である。本図に描かれた寒山は、口を大きく開いては朗らかにお経を唱えていたのだ。

問題は拾得の「そこのけそこのけ」である。たぶん掃除の邪魔だからということなのだろうが、いったい誰を追い払っているのか。

一つには、この絵の前で禅の深義を解き明かしてやろうとばかりに難しい顔をしている鑑賞者。「阿吽の一体を」としたり顔で絵解きする論者もその一人ということになるだろう。「寒山みたく無心に笑え、笑わぬならばそこのけそこのけ」と仙厓さんの喝が聞こえてきそうである。

もう一つ、あるいは飛躍に過ぎるかもしれないが。

描かれた寒山も口にして「大悲心陀羅尼」の朗唱は、むろん真摯な禅の営みに違いないが、それが冒頭「ナムカラタンノー」の後に続けて「トラヤーヤー（哆羅夜耶）」と唱えられるのを聴けば、およそ「子供心」には思わず笑みもこぼれようというもの。

その「トラヤーヤー」を唱え慣れ聞き慣れた仙厓さんが、ある日、ふと「拾得が『やあやあ虎よ、掃除の邪魔だ、そこのけそこのけ』と言ったなら面白い」と思いついたとすれば――。

「指月布袋図」などのことを言い出すまでもなく、見る者に「そこに描かれないもの・見えないもの」を「感じ取らせる・見させる」のが禅画の含みであるとするならば、仙厓さんが本図で「見えないけれども寒山拾得の傍にいないはずの虎」を「描いた（鑑賞者に気づかせようとした）」としても不思議はない。と言うのも、虎は拾得にとっては恩師の眷属、また「寒山・拾得・豊干・虎」は「風狂四人組」として互いに切っても切れない仲、大切な係累だったのだから。

ただ大切なことは、「見えないけれども寒山拾得の傍にいないはずの虎」を鑑賞者に気づかせようとしただけでなく、その虎が「今しも追い払われて本当にいなくなる、見えなくなる瞬間」を描いたことである。仙厓さんは、虎を追い払う拾得の姿を鑑賞者の心内に幻視させることで「拾得が虎を追い払うように、あなたもまた大事なものをすべて捨て去るならば、寒山みたく無心に笑えようものを」と諭しておいでなのかもしれない。



少しおしゃべりが過ぎた。

この絵が描かれたのは仙厓さんが78～83歳の頃、たぶん81か82歳の頃だったのだろう――その時期に集中して用いられた「日月三郎」の印章が押されているから*20。晩年を過ごす仙厓さんの描いた寒山と拾得は、その朗らかで可愛らしい姿のうちに、「すべてを捨てよ」とばかり何とも厳しいことを鑑賞者に迫ってくるかのようである。

[附記]

図版の掲載については、福岡市美術館ならびに出光美術館の皆様方に格別のお力添えを賜りました。心から御礼を申し上げます。

[註]

- * 1) 福岡市美術館編 (2005) 『仙厓 石村コレクション』(石村萬盛堂)
- * 2) 田中一松ほか (1973-1977) 『水墨美術大系 (全 17 巻)』(講談社)
- * 3) 中山喜一郎編 (1986) 『「仙厓」展 ユーモアにつつまれた禅のこころ』(福岡市美術館), 36-37 頁
- * 4) 上掲書 (*3), 31 および 162 頁
- * 5) 出光美術館編 (1988) 『仙厓』(出光美術館, 平凡社)
- * 6) 上掲書 (*5) 所載, 図版 No.149
- * 7) 上掲書 (*3), 155 頁
- * 8) 出光美術館編『没後 170 年記念 仙厓／センガイ／SENGAI 禅画にあそぶ』(出光美術館), 139 頁 (八波浩一さんによる作品解説)
- * 9) 上掲書 (*5) 所載, 図版 No.150 および No.151
- * 10) 上掲書 (*3), 28 頁 (挿図 7)
- * 11) 上掲書 (*3) 所載, 図版 No.10 および No.14
- * 12) 上掲書 (*5) 所載, 図版 No.155
- * 13) 上掲書 (*3), 160-161 頁
- * 14) 上掲書 (*5) 所載, 図版 No.161
- * 15) 上掲書 (*5) 所載, 図版 No.172
- * 16) 鈴木大拙・月村麗子訳 (2004) 『仙厓の書画』(岩波書店, 原著は Dr.Daisetz Suzuki “Sengai, The Zen Master”)
- * 17) 古田紹欽 (1966) 『出光美術館叢書 1 仙厓』(出光美術館)
- * 18) 上掲書 (*3), 165 頁
- * 19) 上掲書 (*5) 所載, 図版 No.176
- * 20) 中山喜一郎 (2003) 『仙厓の○△□ 無法の禅画を楽しむ法』(弦書房), 11 頁